

## 次期学習指導要領への期待 ① 算数の授業づくりを見直す機会

これまで4回にわたって「次期学習指導要領を読む」と題して、新しい学習指導要領の改訂のポイントを見つめてきました。「総括目標が示す学びの方向性（葉月）」および「資質・能力ベースの学年目標（長月）」では、資質・能力ベースで示される「目標」からこれからの算数教育の在り方を見つめました。また、「数学的活動が果たす役割（神無月）」では、問題解決過程を問い直し、拘泥からの脱却を期待する動きを整理しました。さらに、「算数の入口と出口（霜月）」では、算数・数学教育の系統性を大切にしながら、資質・能力ベースで学びを連続させていくための視点を確認しました。70年に一度とまで言われる大幅な理念の転換を図る新基準から、これからの算数・数学教育いかに描くのかはとても大きな課題ではあるものの、今回の改訂が創造的で挑戦的な学びを実現していくチャンスでもあると感じさせます。

このように算数・数学教育を大きく変えていくことになる基準改訂の作業が進行している中、本日は市内会場で一斉授業研究会が行われました。私は8つの授業研究会での成果が、今後の授業改善の方向性を考えるきっかけになってくれることを願っています。それは、指導案の作成に際して、資質・能力ベースでの教材分析や数学的活動の質的改善への工夫など、様々な視点からの検討を経た授業だったからです。授業がどう変わるのか…そのヒントがたくさん詰まっていたように感じています。

まず、これからの資質・能力ベースの授業では「学習のまとめ」を変えていく必要があります。内容ベースの授業では、何を知っているか、または何ができるが「学習のまとめ」に位置付くことが多かったわけですが、それらをいかに使えるようになったのか、さらには使うことで新たにできるようになったことを「学習のまとめ」として明示していく必要があります。そして、「学習のまとめ」を変えるためには、授業の入口の「課題やめあて」の見直していくことが必要になります。学びのゴールをどこに据えるのか…今回の授業はこの問いに果敢に挑戦してくれたと言えるでしょう。

次に、問題解決学習の質的な転換を図ること…、つまり数学的活動を充実させることです。そのために、教師が児童と問題解決のコンテクスト～文脈～を生起することを大切にしたい授業づくりをしてきました。子どもが、「数学的な見方・考え方」を働かせる必然や数学的活動の方向を自覚するとともに、それによって得た知見の価値を実感できるようにするために、常に学びの主体を子どもに据えて、教師と子どもとが一緒になってコンテクストを丁寧に描く…このことを大切にしてくれました。

さらに、算数科として真正な学習場面を設定することや「数学的な見方・考え方」を明示的に繰り返して指導することを丁寧に計画したことです。それらによって、児童が自分事として算数という文化を創造したり、生活の中から算数を創り出したり、算数で学び得たことで自らの姿勢や構えをよりよくしたりすることに繋げようと思いました。算数・数学の教科指導が目指す価値として極めて大切なことをしっかりと見つめて、それに正面から取り組もうとする態度をこれからも大切にしていきたいと思っています。（2016/12/07）